

『流刑地にて』考。あるいは処刑機械“F.”

吉 澤 賢

I

『流刑地にて (*In der Strafkolonie*)』(以下『流刑地』と略す)のクライマックス、将校が自らの権限で幾多の受刑者たちを横たわらせて来たその「ベッド」に、彼自身が自らの意思で我と我が身を横たえ、全てを処刑機械に委ねんとする張り詰めた場面には、同時に極めて濃密なエロスの香りが漂っている。鎧か何かのように身を固めていた軍服の一切を脱ぎ捨てて一糸纏わぬ姿となった将校と機械とが織りなす、あたかも恋人同士と見紛うかのような完璧なシンクロ。

彼が馬鋏に手を近づけただけで、馬鋏は幾度か上下して、彼を迎え入れるに相応しい位置をとった。彼がベッドの縁に手をかけただけで、それはもう振動を開始しているのだった。フェルトの栓が彼の口を出迎えていた。彼は本当はそれを望んでいないらしかったが、躊躇いは一瞬のことで、彼はすぐにそれを受け入れ、フェルトを口に含んだ。(DL: 242)

先に将校が旅行者に説明した通りに機械が作動していたとすれば、「馬鋏」の長針で削られた将校の皮膚から流れ出す血と、それを洗い流し、刻み込まれた文字を鮮明に保つために短針から噴き出す水との入り混じった液体が、やがてベッドに幾重にも敷かれた綿をしとどに濡らし始めたことだろう。

振動する複数の針が受刑者の身体に12時間かけて判決文を書き込み、最後には頭部に配された太い銅鉄製の「鑿」とともに全身を貫いて彼を死に到らし

める、この「独特の装置」と受刑者との関係について、M・アンダーソンは「裸の男が〈ベッド〉に横たえられ〈振動する〉鉄針で刺し貫かれることによって成就する、字を書き込む作業とは性交に似ている」⁽¹⁾と述べている。全裸で拘束され、機械のなす行為を半日にわたって文字通り一身に受け容れることを強えられる受刑者。対するに、鋭利な針の反復運動によって、人間の自他を分かち最も堅固な境界＝皮膚を切り裂き、徐々に相手の体内奥深くへとリズミカルに、そして暴力的に侵入して行く馬鋏。仮にここでバタイユに倣い、性交をひとまず「存在の溶解」とでも言い換えてみた上で（そして無論、この処刑機械と受刑者とが溶け合って一つになることなどあり得ず、機械がもたらすものは快楽ではなく苦痛であり、溶解ではなく死であることは充分に承知した上で）、「存在の溶解の動きにおいて、男性パートナーは原則として能動的な役割を演じ、女性側は受動的」⁽²⁾であり、「エロティシズムの女性パートナーは供犠の生贄のごとくに現れ、男性パートナーは供犠の執行者のごとくに現れる」⁽³⁾のであってみれば、アンダーソンの言うこの「性交」においては、性の顛倒が生じていることになる。即ち、黒い長持ちのようにも見える同じ大きさの「図案家」とベッドの四隅を真鍮の柱で接続し、そのはざまに馬鋏がぶら下がっているという、この「巨大な構築物」(DL: 208)の、硬質で威圧するような力強い男性的イメージと対照させられているのは、男の受刑者の、衣服を全て剥ぎ取られた無防備で無力な、そして最後には鉄のファロスで貫かれて果てる女性的イメージなのである。

無論、この陰惨な拷問の情景にそもそもセクシュアルな色合いなど認めず、たとえば馬鋏の動作をカフカの「書く」という行為の形象と単純にとらえるならば⁽⁴⁾、今述べたような事柄は全く問題とはならない。

あるいはまた、ここにエロスの香りを嗅ぎ取る場合でも、カフカにおける異性との肉体的快楽とエクリチュールの快楽とを相容れぬ敵対的なものとして位置づけ、彼が後者を阻害するものとして前者を憎み、異性との交渉を実生活から排除して、快楽の源泉をテキスト生産の場へと局限することで、「文字との擬似的なエロス」にひたすら身を委ね、「身体へ書字を受精させる快楽」を味

わい尽くそうとした、と読むならば⁽⁵⁾、馬鐮によって文字を書き込まれる受刑者を、彼自身の言い方を模すなら「文学そのもの」⁽⁶⁾であるために、恐らくは最も愛したであろう女性との婚約を二度までも破棄し、終生独身のままであり続けたカフカその人の姿に重ねあわせるという解釈も、決して納得出来ぬものではない。

しかし、たとえカフカにとっての創作行為が「ある種の性交に匹敵する」ものであり、「彼の肉体と魂が物語のための産道を開ける」時に、その感覚と快楽を「身体的に感受」出来たのだとしても⁽⁷⁾、初めに引用した機械と将校との関係を、単に書字とのエロティックな戯れという抽象的観念に還元させてしまいうには、この情景は余りに肉感的で生々しいのである。そのボディの隅々まで熟知した機械にそっと手を差し伸べる将校の素振りに阿吽の呼吸で応じるように、意思を持たぬはずの機械が彼を受け入れるに相応しい姿勢を自らとり、彼が手を触れると同時に小刻みに震え始める——その光景は思わず、お互いを知り尽くした男女の愛の行為を想起させずにはおかない。

私は先に「性の顛倒」と書いた。しかし、この場面で描かれるイメージから目を転じ、語彙のレベルで見ると、そこには全く異なった様相が現れる。将校は無論、男性である。が、一方の機械は女性名詞“*Maschine*”，そしてそれを指す人称代名詞“*sie*”(＝彼女)で呼ばれている。「これは独特な装置(*ein eigentümlicher Apparat*)なのです。」(DL: 203)と始まる『流刑地』の前半部から後半部へと移る過程で、この処刑器具を指すために、男性名詞“*Apparat*”から女性名詞“*Maschine*”への完全な切り替えがなされていることは注意しておいて良い。しかも、この女性名詞が初出するのは、将校による処刑手順の説明が終わり、続いて実際に受刑者がその器具につながれることになる場面である。男性をその体内に迎え入れるに際して、性を女性へと変化させる機械。そう言えば、上下にそれぞれ同じ大きさの図案家とベッドが配されているという、この機械のシンメトリックな構造は、どこか女性の性器を思わせるようでもある。

恐らくこの箇所は間違いなく、「書くこと」と同時に、エロティシズムにつ

いても語っているのだ。

しかし、初め音もなく行われていた機械による将校の身体への書き込みは突如として破綻を来す。図案家の蓋がゆっくりと持ち上がるや次々と歯車が回り出し、箱の外へと落下し始める。この異変に驚いた「旅行者」が機械の下部へと目を転じると、今や馬鋏は書いておらず、ベッドと連動して将校の体を締め上げ、針が一層深く彼の体内に食い入っている。そして、完全な機能不全に陥った機械は将校とともに自壊して行く。

もし、機械と将校との関係が愛の行為の描写であるとするなら、何ゆえそれはこれ程にも痛々しく描かれねばならないのか？

II

この奇妙な処刑に用いられる機械を作動させ、それに文字を書かせるためには、一種のプログラミングが必要である。それを将校はどのように説明する。

あの図案家の中には、馬鋏の動作を決める歯車装置が入っています。そして、この歯車装置は、判決が指示する図案に合わせて調整されるのです。
(DL: 217)

ここで言われる、機械への情報のインプットとアウトプット、それは手紙の遣り取りとどこか相通じる側面を持っている。そして、女性として名指しされる機械と手紙という二つのキーワードが我々に想起させるのは、カフカの個人的な恋愛体験の一つである。

『流刑地』は『審判 (*Der Proceß*)』の執筆を一時中断して書かれたテキストであるが、その未完の長篇の背景にあるものが、カフカと一人の女性、最初の婚約者であるフェリーツェ・パウアーとの婚約解消劇であることは、カネッティの『もう一つの審判』に詳しく跡づけられている通りである。

婚約解消後に執筆を開始したものの、筆の勢いが鈍って来たこの長編を先へ

進めるため、カフカは二週間の休暇を取るのだが、それでも思うに任せないこのテキストを一旦保留し、休暇の後半、彼は新たに『流刑地』に取りかかる。その当時の日記（1914年10月15日）には、次のように記されている。

二週間。一部は満足の行く仕事。自分の状況を完全に理解。（中略）BI嬢から手紙。それをどうしたものかは分からない。とりあえず分かっているのは、僕が独りでいるのに決まっているということだ。（中略）僕はまた、自分がF.を愛しているのかも分からない。（中略）しかし、それら全てにもかかわらず、限らない誘惑がまたぞろ動き始め、僕は夕暮れの間中、その手紙と戯れていた。（T：678）

「BI嬢」とは、フェリーツェの友人として先の婚約破棄の場にも立会い、その後、カフカとフェリーツェとの仲を再び取り持つことになったグレーテ・ブロッホのことであるが、文面にその彼女からの「手紙」とあるのは、まさにその仲立ちを果たすことになったもののことを指している。つまり、『流刑地』成立時のカフカの身边には、三ヶ月前に別れたはずのフェリーツェの息遣いが、微かながらも確実に存在していたということである⁽⁸⁾。

そうした中で、カフカは一体、自らのどのような状況を「理解」し、またどのような「限らない誘惑」と戯れたのであろうか？我々は、カフカとフェリーツェが共に辿った足跡を思い出しておかなければならない。

彼とフェリーツェとの最初の出会いは1912年8月13日、親友マックス・プロート宅においてである。それぞれ29歳と24歳。ほぼひと月後の9月20日、彼からの最初の手紙を皮切りに、5年以上にわたる交際が開始する。その翌々日、彼の作家生活の大きな転換点をなした小品『判決（*Das Urteil*）』を、彼は一晩で一気書き上げる。1914年6月1日、第一回目の婚約。翌月7月12日、婚約解消。同年10月下旬、上述のようにグレーテ・ブロッホからの手紙をきっかけとして交際再開。1917年7月上旬、二度目の婚約。だが、8月9日から10日にかけての夜にカフカは咯血し、後に肺結核の診断が下される。

そして 12 月末、最終的な婚約破棄——これが二人の交際の軌跡である。

当時、フェリーツェはベルリンの「カール・リントシュトレーム株式会社」にて「パルログラフ」、現在のボイスレコーダーにあたる機器の宣伝・販売を手がけていた有能な職業人であり、また、早くに両親が別居状態にあったため、若くして速記タイピストとして身を立てた彼女は、バウアー家の家計を支える一家の大黒柱でもあった。

一方のカフカは半官半民の「プラハ労働者災害保険局」に勤務する薄給の一人役であり、29 歳になっても尚、両親の家に寝起きする「痩せた体」の弱々しい男である。

一方は実際のでエネルギッシュな、自立した女性、片や一方は引っ込み思案で虚弱、勤め人でありながら未だに親の脛かじりを続ける男性。そうした全てにおいて対極に位置する二人が交際を開始し、その後、彼らの間には 500 通を越す手紙が往来することになる。

この両者の対照的な姿は、言い換えれば「強き者」と「弱き者」のそれである。ここで付言しておかねばならないのは、二人が実際に会ったのは 5 年の交際期間の間で僅か数度に過ぎず、その関係のほとんどは手紙の遣り取りでしかなかったということである。生身のフェリーツェは必ずしも強い女性などではなかったであろう。だが、文通が活発になるにつれ、相手の姿が見えない手紙というメディアの中で、カフカにとっての活動的な彼女は時とともにその強さを増幅させて行く。フェリーツェは益々「陽気で、生き生きして、自信を持ち、健康」(F: 400)になり、対して、カフカは益々自虐的に「病気で弱い、人付き合いの悪い、無口で陰気な、ぎこちない、ほとんど絶望的な人間」(F: 403)であることに徹する。この「強き者」と「弱き者」との関係は、カフカの配役によって手紙という舞台上で演じられる、あたかも一つの演劇のようですらある。

こうした対人関係についての眼差しの雛形がどこにあるかは、『父への手紙 (*Brief an dem Vater*)』の中にはっきりと示されている。

たとえば今でも覚えています、僕たちはよく船室で一緒に服を脱いだことがありました。痩せこけ、ひ弱で、ひよろひよろの僕。強壯で、背が高く、恰幅の良いあなた。既に船室の中で自分のみじめでした。あなたに対してばかりではなく、全世界に対してです。僕にとってはあなたが全ての物事の尺度だったのでから。(NSⅡ：151 傍点筆者)

作品の中ではしばしば、無力な息子の前に立ち塞がる屈強で暴君的な父親として形象化される彼の父ヘルマン・カフカ。チェコの片田舎から行商人として出発し、腕一本で叩き上げ、一代でプラハ中心部に高級装飾品店を開くにまで至った有能な実業家。幼くして他界した二人の息子を含めれば六人の子供をなした、一家の長としての精力漲る男。その逞しい体躯と生命力で、カフカを常に脅かし続ける一人の人間——そのような人間の傍らにあって、それとは対極をなす自らの貧弱極まりない身体へと向けられる眼差しの強度が増すほどに、カフカのみじめな気持ちは、父親の影を越えて「全世界に対して」拡大して行く。「強壯」対「虚弱」、この解消し難い対立の構図は、カフカの中では父に対してのみならず、自らと関わりある全ての人間に対しても容赦なく敷衍される。

突き詰めれば人間としての生命力、それがカフカにとって驚異であり脅威でもあったならば、父と並んで最初の婚約者フェリーツェその人もまた、恐らくはそうした強さを彼の前に体現した人であった。いかなる関係といえども権力の枠組みから逃れることは出来ず、それは恋愛とて例外ではない。初め、家庭内においてしか意識されていなかった、父と自分との関係における「強き者」と「弱き者」という力の構図は、次第に彼女との関係の上にも投影されて行くことになる。

だが、父との関係とフェリーツェとのそれには、決定的な違いがある。それは相手との身体的な距離である。

父は同じ屋根の下にあって、常に彼をその力の直接的な脅威のもとに晒す。しかし、同じ強者であってもフェリーツェの場合は、手紙だけが橋渡し可能な

(無論、それはカフカの側からの言い分に過ぎないのだが) 間隙が、プラハにおける彼の生活空間を、彼の部屋、彼の書きものの机を絶対不可侵のアジールとする。彼はその身を常に安全圏に置きつつ自らの弱さを切々と彼女に訴え続け、その度に口を開ける傷口に、彼女から引き出す慰めや励ましの言葉を「腐蝕性の液体」(DL: 226) のように滴らせることで、己の無力さを我が身に一層深く刻み込むことが出来るであろう⁽⁹⁾。『変身 (*Die Verwandlung*)』のグレーゴルのように、たちどころに父の巨大な足で踏み潰される危険はそこには全くなく、彼は安心して「弱き者」たる自らのありようを甘受することが出来る。そして、自身の弱さの確かな手触りこそが、彼が繰り返し描き続けた権力に翻弄される人物たちに向ける眼差しを形作ることをも可能にするのである。父に向けては異邦人に対するように口を閉ざすカフカが、それ故、フェリーツェに対しては饒舌になる。「お父さんの胸にすがって訴えられぬこと」(NS II: 192) も、彼女に対しては訴えることが可能になる。

だが、そうしたマゾヒスティックな意識に動機付けられているとはいえ、日常の悲喜こもごも、身の周りで起こる様々な事柄、自分の健康状態、そしてとりわけ、自分がものを書いているということ——恋人同士の手紙の遣り取りであるならば違和感なく文面に組み込まれるであろう、そうした「部品を湯水の如く使って」(DL: 221)、表向きは何の支障もなく継続するように思われた交際であっても、双方とも社会的にそれ相応の年齢に達した男女として関係が続けて行く以上、やがてその先に見えて来るものは自ずから決まって来る。

『流刑地』で描かれる機械の特徴は、反復して文字を書き込むことである。馬鋏の針は受刑者の全身の皮膚の上に隈なく躍りつつ、しかし繰り返し同じ場所に戻って来ては、飾り文字が織りなすアラベスク模様の中に、選ばれた者にしか読み取ることの出来ないアトラクター＝判決文を徐々に深く刻み込んで行く。部外者たる旅行者の目には「迷路のように互いに幾重にも交叉したいくつもの線」(DL: 217) としか映らない、馬鋏が書く夥しいほどの飾り文字とは、あるいは二人の恋人の間に交わされる手紙に記されるはずの文字の総体であるのかも知れない。苦痛の中で受刑者の流す血と、馬鋏の短針から噴き出し

て傷口を洗い流す水とは、さながらインクのようなものである。その痕跡を「特殊加工された綿」(DL: 208)が吸い取り、機械の脇に掘られた穴の中へ一枚、また一枚と落ちて行く。

時には日に数通にも及ぶ、無限に増殖するのを止めないかのような文字の行き来の中で、やがてこの「強き者」と「弱き者」にしか判読することの出来ない判決文がゆっくりと、しかし明瞭な形を取って現れ始めるであろう。

だが、それはカフカの最も恐れている事態である。次第に彼女の中の「一つの歯車」が軋り始める。そして時とともに「酷く磨耗して」、その凄まじい音のせいで「お互いに何を言っているのか、ほとんど分からなくなる。」(DL: 207)

「彼女なしで生きることは出来ないが、彼女とともに生きることも出来ない」(T: 636)と彼は書く。この完全に矛盾した論理の根底にあるものを、我々は正確に理解しなければならない。これは、文学を選ぶか結婚を選ぶかといった、単純な二者択一の問題ではないのである。

フェリーツェとの蜜月の間に『判決』『火夫 (*Der Heizer*)』『変身』といった、作家自身が出版に値すると見なした完成度の高いテキストが生まれたように、書くためには彼女の存在が必要であるが、それには彼女との距離が維持され、弱者たる自らの安全圏が確保されねばならない。一方で、他ならぬその弱さゆえに「僕自身の生の襲撃、僕という人間の要求の数々、時代や年寄りどもの攻撃、書きたいという気持ちが漠然と押し寄せて来ること、不眠症、差し迫る狂気。こういったもの全てを独りで耐えることが出来ない」(T: 568 f.) カフカにとって、フェリーツェと結びつくことは「生きることにより多くの抵抗力を与え」(T: 569)もするだろう。書くことと生きることは、いずれも根の部分でフェリーツェと結びついているが故に、彼女を失うことは、二つの生の可能性を同時に失うことを意味する。かといって、フェリーツェとの結婚を選べば、彼女との共同生活を手に入れる代償として、書く人間としての彼は失われねばならない。つまりこういうことだ——カフカがどちらを選択しようと、彼が書くことを失わなければならないという事実は変わらないのである。

それ故、「文学そのもの」であろうとする限り、いずれかを選び取ること自体、そもそも彼にとっては不可能なのだ。従って、もしこのジレンマに出口があるとすれば、それは「自殺」しかないであろう⁽¹⁰⁾。

こうして彼の頭は完全に二つに引き裂かれる。

しかし、それはあくまでカフカ個人の事情でしかない。自らの弱さを累々と積み上げて彼女への防壁とし、最終判決の先延ばしをはかるカフカに対して、（彼の手紙の文面から察するに）時に叱咤し、時に同情し、時に慰め、時に強情、時に沈黙をもって決断を迫るフェリーツェの粘り強い猛攻によって、彼の置かれた状況は結婚へ向けて次第に狭められて行く。「僕らの共通の幸せについての彼女の意見に逆らうには、僕は余りに弱すぎ、彼女が可能と見なすことを、それが僕に責任がある限りは、実現しない訳には行かない。」（T：574）と彼は書く。力の差は歴然としている。彼は袋小路へと追い込まれる。

そして、彼が訴え続けた自らの弱さはある時、一つのイメージへと収斂して行く。1913年6月中旬の、結婚の不可能性を説く何度目かの手紙には、この様に記される。

君は、健康な少女たる君の本性にはそれこそが相応しいのだろうけれど、本当の子供たちのために自らを犠牲にする代わりに、この人間（＝カフカ。著者註）のために自分を犠牲にしなければならないだろうが、そいつは子供っぽく、しかし最悪の意味で子供っぽく、ひょっとすると最もましな場合でも、君から習うことになるのは、文字通り人間らしい言葉ぐらいのものだろう。（F：403 傍点筆者）

カネッティが「小さきものへの変身」⁽¹¹⁾と呼んだものがここにもある。この、弱き者としての「子供」、それは続いて見るように『流刑地』で重要な意味を持つことになるであろう。

III

リオタールは『インファンス解説』の中で『流刑地』を取り上げ、「幼年」あるいは「幼児」というキーワードで将校と受刑者とを結び付けているが⁽¹²⁾、アプローチの仕方は異なるとは言え、これは非常に示唆的である。上官と部下、裁定者と被裁定者、饒舌と無口、知性（たとえそれがどれほど狂気じみたものに見えようと）と愚鈍。彼らは一見すると悉く対極に位置しているようでありながら、こと従順さという点においては性質を同じくしている。受刑者は自らの生命が危険にさらされているにもかかわらず「犬のように大人しく」（DL：203）機械につながれ、将校は、旧司令官が築き上げたものの全ての「唯一の擁護者」（DL：224）として、司令官手書きの図面と機械とに絶対的な忠誠を尽くす。自らが所属する制度に対して一切の疑問をさしはさむことをしない、彼らのこの従順さは、幼児のそれとよく似ている——親の完全な庇護下にあって、何ら心を乱されることなく、安心して自らの内に充足し切っている幼児の。

また、将校と旅行者との会話が理解出来ず、呆けた面持ちでその視線を一方の顔からもう一方の顔へと移し続けることを止めない受刑者の仕草。あるいは、自らの行いの正当性に対する純真とさえ形容しうるほどの将校の確信、乃至は独善性。「裁判の不正ささと死刑執行の非人間性には疑問の余地なし」（DL：222）と考える実際の旅行者とは裏腹に、旧制度復権を目論む彼のシナリオの中での旅行者は、この方式を「最も人間的なもの、最も人間の尊厳に適ったもの」（DL：229）であるとみなす。テキストで克明に描写される彼らの言動のいちいち、まさに無邪気な幼児のそれを強く思わせるものがある。

と同時に、彼らは「弱き者」でもある。受刑者は「従卒」（DL：212）として、軍隊という最も強固な序列社会の最下層に位置する人間であり、上官侮辱の罪によって、手足と頸とを鎖で拘束されている。彼の上官であり、自分こそが旧司令官の代理人として裁判制度の一切を取り仕切る権限と資格を有すると

自負してやまない将校は、テキストの最後で、茶店の床下に埋葬された旧司令官の骸を夜陰に紛れて掘り起こそうとするたびに追い払われる程度の、力なき者であった真の姿を露呈する。

かつて刑の執行の際には、子供たちに特権的地位が与えられていたことを、ここで思い出しておかねばならない。子供を最優先せよ、との旧司令官の指示に従い、「多くの者がもはや全く眺めようとせず、目を閉じて砂の上にひれ伏す」(DL: 226) 中、将校は「小さな子供を二人、左右の腕にそれぞれ抱きかかえるようにして」(DL: 226) その場にしゃがみこみ、刑の経過に目を凝らす。そして6時間が過ぎようという頃、受刑者の苦痛に苛まれた顔の上に「分別」が浮かび、それが「晴れ晴れとした表情 (Verklärung)」へと変わっていくのを、「自分とともに馬鋏の下に身を横たえたい」(DL: 219) ような気持ちで眺めるのである。

この処刑とは、子供だけに見ることを許された儀式、ある種のイニシエーションのようなものなのかも知れない。受刑者は身体の痛苦を経ることによって分別を獲得し、新たな世界へと変容 (Verklärung) を遂げる。12 時間後に馬鋏と鑿に刺し貫かれ、穴の底へと投げ捨てられる彼の身体は、もはや再生した受刑者の魂が去ったあとの抜け殻にしか過ぎない。刑の成り行きを将校の両脇で観察する子供たちの目に映る光景は、恐らくは将来自らも体験することになるであろう、通過儀礼の次第の一切なのである。

将校の語るところによれば、かつての処刑は流刑地をあげての一大セレモニーであった。それは受刑者を主人公とする、華々しい舞台である。受刑者となるべき人間は、確かに自己弁護の機会すら与えられることなく処刑台につなぐられ、苦悶の果ての 12 時間後に死出の旅路につくことになる。だが、「罪は常に疑いなし」(DL: 212) の原則に従って鎖をかけられた罪人であるはずの彼は、将校からは決してぞんざいに扱われる訳ではない。受刑者がいてはならない場所へと進み出てきた際、将校から土くれを投げつけられてその咎の責を負うのは彼ではなく、うたた寝して彼を監視することを怠った兵士の方である。「注意して扱え！」(DL: 216) と将校は言う。そして、引きずり倒されて立

ち上がれず手足をばたつかせる受刑者を、将校は手ずから助け起こそうとする。かつての刑執行の折には、馬鍬の下に受刑者を横たえる作業は、旧司令官直々の仕事であったことを思い出さねばならない。受刑者とは聖別された人間なのである。

刑を執行する将校と受刑者とは、処刑という儀式を成立させる上で、機械を巡って一種の共犯関係にある。受刑者の無抵抗の理由は、この点によっても裏付けられる。だが、そうでありながら、同時に彼らは闘う間柄でもある。すんでのところで放免され、彼に代わって今度は将校自らが馬鍬の下に横たわることを理解した時、受刑者は自分が「復讐」(DL: 241)を成し遂げたと破顔する——復讐とはそもそも闘いを前提とするものだ。この両者の関係は、最初の破局後、フェリーツェ宛ての第一信にある、「僕の中には互いに闘い合う二人がいたし、今もいる。(中略)二人は闘うが、互いに殴りあう真の闘いじゃない。」(F: 617)というカフカの言葉と響き合っている。受刑者と将校とは、カフカの血を分け合った、カフカという一つの身体を共有する双面のヤヌスなのである⁽¹³⁾。

だが、かつての受刑者に訪れたという「分別」と「晴れ晴れとした表情」は、遂に将校には到来しない。機械は完全に崩壊し、彼は「生きていた時の顔のまま」(DL: 245)針に串刺しにされ、穴に落ちきらずに垂れ下がる。一人のカフカには苦しみの末の浄福が約束され、もう一人のカフカにはその到来が拒まれる。それは何ゆえか？

IV

機械に文字を書かせるには、プログラムが必要であった。そしてそれは、手書きの図案でなければならない。

カフカがフェリーツェを手紙でもっていかに巧妙に操作し、自らの望む言動を彼女から引き出していたかは、カネッティが克明に描き出して見せた通りである。しかも、未来の婚約者に向けて「タイプライターでは僕に満足行くほど

速く書けないのです」(F: 44)と述べた彼は、大抵の場合その手紙を自らの手で書いた。当のフェリーツェからの手紙はカフカ自身の手によって破棄されてしまっているため、その詳細はわからないものの、そのキャリアを速記タイピストとしてスタートさせた女性であることを考えれば、彼女の手と思考速度に相応しかったのはペンよりもタイプライターであった可能性は大いにある。また、社の業務代理人としての多忙なスケジュールの中で、たった一通の手紙を書くためにカフカのように夜通し、時には数日を充てるような時間など、彼女にはそもそもなかったことであろう。ここで彼女はその職能を十二分に発揮したに違いない。

「本来なら機械工に任せてもよさそうな」(DL: 204)作業に将校自ら携わることを旅行者は怪訝に思うが、それは至極当然のことである。自分の望む通りに機械に図柄を打ち出させたいのならば、カフカと同じく将校もまた、手をグリスで汚してでも自らメンテナンスしなければならないからである。

手紙と文字を書く機械、この二つのイメージを結びつけ、ドゥルーズ=ガタリはこう述べている。「もしもカフカの手紙が完全に作品の一部になっているとすれば、それは手紙が、カフカが考えるような文学機械の不可欠の歯車動力の部分だからである。たとえこの機械が『流刑地にて』の機械と同様に消滅するか爆発する運命にあるとしても。」⁽¹⁴⁾そして事実、事態はそうになる。

カフカの双面として、機械=彼女と交わる資格を持つ受刑者と将校には、決定的な違いがある。受刑者の口は言葉を語らず、将校の口は語る。受刑者は判決文を身体を通して理解し、将校は目で読み取る。将校とは言葉／文字を司る者である。自らに刑を執行するために将校が一つ一つ軍服を脱いで行くと、最後に残るのは「短剣」のみとなる。素肌に短剣を帯びる、これは考えてみれば奇異なことだ。この短剣にムラデクは「カフカの筆記具」を見る⁽¹⁵⁾。将校が最後まで我が身から離そうとしなかったもの、それは紛れもなく文字を司る者としてのアトリビュート、切っ先の鋭い筆記具である。文字を記すための剣を折り、言葉を話す口をフェルトの栓で塞いで、裸となった将校は遂にベッドに横たわる。

カフカのテキストに頻繁に現れる「ベッド」という形象が持つ意味について、三瓶憲彦は次のような指摘を行う。「〈ベッド〉とは、まさしく自己が、社会的な自己存在のための諸条件の一切を脱ぎ去り、自己が〈自己自身〉に還る唯一決定的〈場〉として、見いだされるのであり、さらに言えば〈ベッド〉とは自己がもう一人の自己と対峙する〈場〉であり、まさに〈ベッド〉においてこそ社会内存在としての自己と、裸形の〈自己〉との極大の偏差があらわになる恐るべき〈場〉であり、まさにカフカの主人公は〈ベッド〉においてその社会内存在者たることを一旦停止し、さらには社会内存在者たる権利を剥奪され、無規定の〈あるもの〉へ、意味の未定の、それ故不気味で不定形な〈あるもの〉へと矮小化され、畸形化されていく自己を、見いだすのである。」⁽¹⁶⁾将校は脱いだ軍服を丁重に扱い、房飾りをきれいに撫でつけてから、やにわにそれを荒々しく穴に投げ込んでしまう。「この細心さにはおよそ不釣合いな」(DL: 240) 将校の振舞いは、自らの拠り所として来たものに名残惜しく最後の別れを告げ——彼は軍服を「故郷」と形容する(DL: 204)——、まさに断腸の思いで、しかし決然たる態度でそれをかなぐり捨てる、そのような身振りである。

1913年1月2日から3日にかけての手紙に、カフカはこのように記す。

けれど最愛のフェリーツェ、これだけはわかって欲しい、もし僕がこのさき書くことを失うようなら、君と全てを失わずには済まないということ
を。(F: 227)

言葉／文字を捨てた将校は、こうしてむき出しの自己、裸形の肉体となって機械＝彼女と交わる。そしてそれは、現実のカフカが遂になし得なかった行動である。機械はその威容の下からようやく本来の性を現し、彼を迎え入れるべく、自ら体位を整えるであろう。結びつきが遂に成就し、菌車の騒音が止む——しかし、それは一瞬のことに過ぎない。最早レゾンデートルを持たず、何物でもなくなった将校の肉体は必然的に、文字通りの「生ける屍」とならざる

を得ず、と同時に、彼の与える文字によって生かされて来た機械もまた、それによって与えられるべき糧を失い、音立てて瓦解しながら彼とともに滅んで行くより他ないのである。

この文章の最初において発した問いをもう一度繰り返そう、将校と機械との愛の行為が何ゆえそれほどに残酷であるのか？その答えはここにある。そして、女性との身体的距離をゼロにして「変容」を遂げること。言葉／文字を司るが故にその当然のことがなせぬのであれば、将校＝カフカの身体に刻まれるべき最終判決文として“*Sei gerecht!*（なすべきことをなせ）”（DL：238）以上に相応しいものはないであろう⁽¹⁷⁾。

V

この一幕の残酷劇の背景にあるのは、新旧司令官の対立であるとされる。将校によれば、旧司令官の死後、当流刑地に着任した新司令官は、前者の「畢生の事業」（DL：225）たるこの刑罰制度を破棄し、新しい制度を導入しようと画策している。新司令官は愛妾たち（*Damen*）を従えているが、彼女らはコケットリーを露わにして、刑場に向かう受刑者の喉に「砂糖菓子を詰め込み」（DL：223）、女性もののハンカチを与え、将校の算段では制度を擁護するために発言するはずの旅行者の口を塞ぎ、彼の手をとって「指で弄ぶ」（DL：234）。新司令官が会議で議題とするのは、刑の執行についてではなく、決まって「港湾建設」（DL：233）である。

女性のコケティッシュな振舞いと「港湾建設」、換言すればセクシュアルな交わりと外部社会とのつながり、これはアンダーソンが“*Verkehr*（交通）”というキーワードの中に見てとった二重構造と同じである⁽¹⁸⁾。旧司令官に絶対の忠誠を尽くす将校は、これを憂い、退けようとする。

ムラデクによれば、それは「まさしく、書きものをする自らの手の自由を案ずる、詩人の去勢不安である。（中略）流刑地としての《独身者生活》はこれによって終焉を迎えることであろう。流刑地の独立性は従って、内に向けては

女性によって、外に向けては当流刑地を外部世界と結び付ける《港湾建設》によって危機にさらされている。カフカもまた、女性と世界とを、書くことに対する最大の脅威ととらえている。それ故、彼は地下室や墓穴の奥深くに住まうことを望む。⁽¹⁹⁾だが、処刑機械の運動をカフカの書くことと同一視する彼は、このように先を続ける。「将校にとっては、文字を書く機械自体が——代替物としての——《永遠の恋人》であり、《彼を受け入れる》用意のあるものなのである。」⁽²⁰⁾このように理解することは、女性の姿をことごとく将校の、即ちカフカの住む世界のあちら側に追いやってしまうことを意味する。しかし将校が心酔する旧司令官の傍らにも、ただしたった一度だけではあるが、間違いなく女性の影が兆すのである。将校はかつての処刑の日の様子を旅行者の前にこのように描き出して見せる。

早朝、司令官が愛妾たち（Damen）とともに現れます。（DL：225）

新司令官にはべる、身体の身振りが描かれる媚態的な“Damen”と、旧司令官の傍らで名詞という記号のみで表される“Damen”。これは言い換えれば、肉体を持つ愛妾と肉体を持たぬ愛妾なのだ。身体を与えられ、エロティックに男性に纏いつく愛妾は、遂にはカフカが得ることのなかった“Verkehr”の世界の住人である。しかし、人としての肉体を持たぬ愛妾が“Verkehr”に参画することは決してあり得ぬ以上、彼女たちは旧司令官の傍らで常に幻影のようなものとして、または単なる文字記号として漂い続けるしかない。カフカにとって手紙の向こうのフェリーツェがそうであったように。あるいは、将校の脇にいつもたたずみ続けた機械のごとく、自らの指示に従いひたすら文字を書き続ける、人の姿をなさぬ異形の存在として。

女性を遙か彼方の幻影として留め、書くことを生きながらえさせようとするカフカと、身体的距離をなくして新たな変容を夢見るカフカ。『流刑地』とは、女性を排除する闘いの物語ではなく、女性との結びつきの可能性をめぐる絶望的な闘いの物語なのである。

しかし、ここで一つの疑問が残る。将校がそこまで力説する新旧司令官の対立とは、果たしてそこまで決定的なものだったのであろうか？旧司令官の姿は将校のノスタルジーの中で神々しく美化され、一方新司令官のそれは前者の業績を葬り去ろうとする、愛欲にまみれたりアリスト然として描かれる。我々に知らされる両者の姿は、ともに将校の語る言葉の中での存在に過ぎず、この二人が肉を備えた者としてテキストの前景に現れることは遂にないのだ。そしてこれは旅行者にしても同じことである。曰く「あらゆることを前制度を廃棄する口実に使う」(DL: 221) という新司令官の態度を非難し、機械の窮状を嘆く将校の訴えを聞いて、旅行者はこのように考える。

この方式の不公正と処刑の非人道性は疑うべくもない。(中略)そして自分がこの処刑に招かれたということは、この裁判について自分の判断が求められていることをさえ意味しているのかも知れぬ。これはしかし、たった今自分が聞き違えようもなくはっきりと耳にしたように、司令官がこの方式の信奉者ではなく、ほとんど敵意をもって将校に相対しているからには、一層ありうることにように思われる。(DL: 222 f)

テキストにおいてこの箇所が体験話法で語られており、その上「かも知れぬ」「ありうる」「ように思われる」などの仮定的言辞の積み重ねによって語られているように、旅行者にとっての新司令官の姿もまた、将校の発言から推し量られるイメージに過ぎない。

旧司令官はもはや死して語らず、新司令官も決定的なことは何一つ旅行者には告げない。白黒が明確でないそのあわいの中で、旅行者はこの制度に対して「否」を言い渡す。将校の要請をきっぱりとはねつけ、彼を死に至らしめつつも、処刑を免れ、一緒に連れて行って欲しいと懇願する受刑者を追い払い、一人ボートに乗って島を離れる旅行者は、しかし最終的にはいずれをよしとするべきかの判断を留保しているようにも見える。将校に対しても受刑者に対しても最後まで距離を置こうとつとめる、異邦人たるこの旅行者は、恐らくは両者

に対する審級なのであり、その中には間違いなく、闘う二人のカフカを眺めるもう一人のカフカがいる。

言葉を司った屍と言葉を持たぬ肉体を残し、旅行者は去る。こうして流刑地は再び扉を閉ざし、外部から孤立した島に戻る。

誤解を恐れずに言えば、ひょっとするとまだ何らかの連絡路が残されていたかも知れぬ新旧司令官の対立構図の中で、自らの「確信」(DL: 246)のみに殉死して行く将校の姿は、限りないイロニーを喚起する。そしてその裏には、現実への決定的な一歩を前にして逡巡し、遂には足を踏み出すことの出来なかったカフカ自身の、自らに対するシニカルな眼差しも透けて見えるのである。

カフカがフェリーツェに語った「地下室」や「墓穴」を思い出させずにはおかない「天井が低く奥行きが深い、洞窟のような」(DL: 246)茶店の奥で、旅行者が最後に目にした旧司令官の墓碑銘には、次のような碑文が記されている。

ココニー予言アリテ曰ク、幾年月カノノチ司令官ハ蘇リ、コノ家屋ヨリ出
デテ信奉セル者ヲヲ率イ、当流刑地ヲバ奪還セントス。汝ラ信ジヨ、ソシ
テ待テ。(DL: 247)

この流刑地が存在する限り、いつの日にかこの予言にあるように再び旧司令官は蘇り、新たな将校が生まれ、新たな処刑機械をめぐって、旅行者が目にしたと同じ戦いが再現されるかも知れない。先述したグレーテ・ブロッホからの手紙が届いた1914年10月15日の日記の記述は、このように続く。「F.のことは二度と生き返ることなどありえない死者のように夢想して来た。そして今、彼女に手とどくチャンスを与えられてみると、彼女は再び全ての中心にいる。」(T: 680 f.)

そしてそのひと月半後の11月30日の日記に、カフカは更にこう書き記す。

そして人間たちから完全に隔離された何かのけだもののように、僕はまた

もや首をゆらゆらさせながら、合い間の時間のために、F. をもう一度手に入れようと試みるかも知れない。(T: 703)

予言は的中する。カフカは再びフェリーツェを我がものとする闘いを開始し、それはまた彼の失敗に終わるだろう——ただ、その闘いに突如として幕を引いたのは、彼の中に住まう二人のカフカのいずれかではなく、結核という死に至る病であったのだが。

使用テキスト（引用および参照に際しては、本文中に略号とページ数のみ記すこととする。）

- DL: Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Kritische Ausgabe, hg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, New York / Frankfurt a. M. 1994
- NS II: Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Kritische Ausgabe, hg. v. Jost Schillemeit, Frankfurt a. M. 1992.
- T: Kafka, Franz: Tagebücher. Kritische Ausgabe, hg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley, Frankfurt a. M. 1990.
- F: Kafka, Franz: Briefe an Felice. hg. v. Erich Heller und Jürgen Born, Frankfurt a. M. 1967

註

- (1) マーク・アンダーソン『カフカの衣装』高品書店 1997 p.387
- (2) ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』ちくま学芸文庫 2004 p.28
- (3) バタイユ, 上掲書。p.29
- (4) Vgl. Mladek, Klaus: »Ein eigentümlicher Apparat«. Franz Kafkas »In der Strafkolonie«, in: Text&Kritik, Sonderband, hg. v. Heinz Ludwig Arnold, München. 2006, S.120 f. また、テキストにおいて馬鋤の作業は schreiben（書く）と表されている。
- (5) 尾張充典『否定詩学』鳥影社 2008 p.24 以下参照。
- (6) Vgl. F: 444
- (7) 尾張, 上掲書。p.22 以下参照。
- (8) H・ビンダーによれば、『流刑地』の執筆開始は 1914 年 10 月 15 日であり、これはグレーテ・ブロッホからの手紙が届いたのと同日である。Vgl. Binder, Hartmut: Kafka-Kommentar. Winkler, München, 1975, S.174

- (9) エリアス・カネッティ『もう一つの審判』法政大学出版局 1997 p.49 参照。
- (10) 先に引用した「僕は彼女なしに生きることは出来ないが…」が記された 1914 年 2 月 14 日の日記の記述は、フェリーツェへの求婚が自殺へと発展するというコンテクストにおいて語られている。Vgl. T: 636 f. またビンダーは、1914 年 10 月 14 日から 15 日にかけての夜にカフカが自殺を空想し、それが『流刑地』の着想につながっていると指摘している。Vgl. Ebd.
- (11) カネッティ、上掲書。P.56:「圧倒的な権力に対する恐怖はカフカにとって決定的なものであり、それから身を守る彼的手段は、小さなものへの変身である。」
- (12) リオタールは機械による身体への文字／掟の書き込みを、感官的に何らの制約も受けない幼児的身体への、法／道徳の書き込みととらえている。法が執行されるためには身体が必要であり、受刑者と将校はそれを有する者として処刑機械に身を委ねることになる。従って、将校もまた受刑者と同じく、法を書き込まれるべき幼児であるということになる。ジャン＝フランソワ・リオタール『インファンス解読』未来社 1995 p.47 以下（『命令－カフカ』）参照。
- (13) いかにも愚鈍に見える受刑者をカフカと同一視することには抵抗があろうが、それについては次のように指摘しておくに留める。受刑者の処刑準備の場面に、「いま馬鋏は更にもう一段低い位置に下りて来た。なぜならそれが瘦せた男だったからである。」(DL: 220) との一文がある。受刑者が単に処刑の残虐さを表すための道具立てに過ぎないのであれば、「瘦せた」の一語はコンテクストには不要であろう。カネッティが言うように、自分が痩せていることに異常な執着を示すカフカであってみれば、この受刑者に彼が自らの姿を重ねているということは十分に考えられる。
- (14) ドゥルーズ＝ガタリ『カフカ マイナー文学のために』法政大学出版局 2000 p.54
- (15) Mladek. Ebd.
- (16) 三瓶憲彦『カフカ内なる法廷』松籟社 2006 p.68-69
- (17) 形容詞“gerecht”には、法的に「正しい」という意味の他に、社会通念上「正当な」「当然な」の意味もある。
- (18) アンダーソン、上掲書。p.49 以下参照。
- (19) Mladek. Ebd.
- (20) Mladek. Ebd.